

「社会移動」概念の再分類と Hold 概念を用いた分析枠組みの検討 (その 2)

——青森県出身首都圏在住者の分析に向けて——

首都大学東京大学院 成田凌

1 目的

地方から都市への人口移動によって生じる地方の過疎／都市の過密は、1970年代から解決すべき重要な課題だった。現在では人口の東京一極集中による「地方消滅」の危機とされている(増田編 2014) 一方で、「地方創生」政策の一つとして都市住民の地方移住が取り上げられている。しかしながら、今後都市住民の地方移住が実現するかは不明確である。

過疎集落や限界集落の存続・持続には「現在」「そこ」で暮らす人々だけではなく、彼らを支えている、近隣自治体に暮らす他出者の存在が重要であることは、既存の過疎研究を中心に指摘されている(例えば山下 2012; 徳野 2014; 小田切 2014 など)。加えて地方の現状を考慮すると、他出者の還流や還流希望者の存在をどのように捉えるかという点が、今後の地域社会にとって重要な課題である(山本 2013)。

以上を背景として、本報告では本州最北端に位置し、首都圏へ人口を排出してきた青森県からの他出者、すなわち青森県出身首都圏在住者の還流可能性を分析するための分析枠組みを検討することを目的とする。なお、本報告は2016年5月に開催された地域社会学会第41回大会(於桜美林大学)での報告を修正・展開したものである。

2 方法

青森県津軽地方における出稼ぎの研究から作道(2006)が提唱し、山下(2014)が応用した Hold 概念(「地域を形成しそこに人を引き留め置く力」)を用いて、人々の「移動」の分類を行う(ここでは2013年5月以降、報告者が調査してきた青森県出身首都圏在住者の事例を中心に用いる)。さらに、そこでの結果を踏まえて「社会移動」概念について考察する。

3 結果と結論

他出者の移動前における社会関係及び移動後に形成した社会関係が、他出者に与える影響の強弱(移動元及び移動先での関係性の保持／断ち切り)を軸に、人々の「移動」が分類可能となった(当日は分析結果を図示して報告する)。

また、鈴木広や安田三郎の「社会移動」概念では、他出者(移動した人々)と移動元の社会との関係性まで考慮されたものとは言い難い。しかしながら、人口の還流可能性について議論する際には、人々が移動する前後における社会関係まで踏まえる必要があるのではないだろうか。

文献

小田切徳美, 2014, 『農山村は消滅しない』岩波書店。 / 増田寛也編, 2014, 『地方消滅』中央公論社。 / 作道信介, 2006, 「ホールドとしての出稼ぎ——青森県津軽地域, A 集落の生活史調査から」『村落社会研究』13(1): 49-60。 / 徳野貞雄, 2014, 「限界集落論から集落変容論へ——修正拡大集落の可能性」徳野貞雄・柏尾珠紀『T型集落点検とライフヒストリーでみえる 家族・集落・女性の底力——限界集落論を超えて』農山漁村文化協会, 14-55。 / 山本努, 2013, 『人口還流(Uターン)と過疎農山村の社会学』学文社。 / 山下祐介, 2012, 『限界集落の真実——過疎の村は消えるのか?』筑摩書房。 / 山下祐介, 2014, 『地方消滅の畏——「増田レポート」と人口減少社会の正体』筑摩書房。